

俺達の高校生活は、平穩に過ぎていく

☒アイゼロ☒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

比企谷八幡とオリジナルヒロインによる、平和で平穏な高校生活です。

作者による冬休み企画。冬休み初日から1日に1話投稿して、最終日に完結させます。

※前作『俺の高校生活は、彼女によって変化が訪れる』を事前に読むことを強く勧めます。じゃないと、話についていけないと思われま

す。

文字数は、前回同様1000文字〜2000文字です。

1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1
8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1
目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
38	35	33	31	29	26	24	22	20	18	16	14	12	9	7	5	3	1

目次

## 1日目

夏休みが終わって、今日から2学期。9月に入ったけど、まだまだ残暑が私を襲う。暑いです。

私、太宰春歌はクリーニングに出した制服で心機一転、いつものポニーテールで木陰で待ち合わせ中。

早く来ないかなー、と心の中で呟くこと5分、待ち合わせ人がやってきた。

「おはよう、八幡」

「おう、おはよ」

質素な挨拶だけど、少しばかり口角が上がってることに嬉しく思う私。そう、この人こそ私の最初で最後（であってほしい）の恋人、目が腐っている比企谷八幡君。

捻くれ過ぎてて、曲がった根性の持ち主だけど、困っている人がいれば助ける優しい人。入学式の日、見知らぬ私を身をもって助けてくれたのが彼。私も気づけば彼に惚れていたのだ。

「どうした？ニヤニヤして」

「べっつにー。1人で惚気てた」

「なんじゃそりゃ」

そんな他愛もない話を繰り返し、腕がぶつかるかぶつからないかの距離で学校へ向かった。

始業式が終わって、担任が戻ってくるまで待機。クラスの皆は夏休みの課題についてとか久しぶりーとか、定番の話に花を咲かせている。かくいう私も中学の頃からの友達4人の梨奈、有希、奏菜、蘭子と会話を広げている。今年の夏休みは数回しか遊んでないから、一杯話そう。八幡とは夏休みかなりの頻度で一緒に遊んでたからね。

ちなみにその八幡は毎度のように読書に励んでいる。

「春歌、ぶっちゃけどこまで進んだの？」

「何が？」

「比企谷君だよ！大人の階段！」

「お、大人の階段って……。まだ高校生なんだからそういうのは……」  
「いやいや、今の時代そう珍しい事じゃないって。春歌は興味ないの？」

「無いつてわけじゃないけど……」

「逆に比企谷君はどうなの？そういう素振りには？」

「たまくに見てくるくらい。けどすぐに視線外すし」

「今時の男子はやっぱり草食が多いのか」

付き合ってからもうすぐ1年でそういうことはさすがに早すぎると思う。八幡だつてきつとそう思ってる。

けど、八幡が私の部屋で寝る時、私に触れてほしいと私は思った。一線越えなくても、触れることならいくらだつてできる。この時は私がおかしいのかなと思つてたけど、恋愛好きの奏菜曰く、好きな人に触れてほしいという感情が普通らしい。女にだつて性欲はある、とか。

ていうか、よく考えたら、女性も結構な変態なんだね。

取り敢えず、いきなり言葉にして『私に触つて』なんて言えないから、無意識のふりをして八幡を誘惑することにした。いや、正確にはそうした方がいいと念押しされた。

## 2日目

今日も今日とて八幡と友達4人で昼ご飯。男1人で他の男子の視線とか報復とかが嫌だと八幡は言っていたけど、そういった人物は全く現れない。まあ、ここ県内有数の進学校だし。そんな頭悪い事する人なんていないか。いたとしても、私達で蹴散らすけど。八幡も強いし。

それともう一つ。2学期が始まってちよつと驚いたことがあった。ここF組の後ろには、上位カーストが集団でいつもその場において、盛り上がりを見せていたが、何故だか結構雰囲気が悪く感じる。職場体験が始まるときに生じたチェーンメールのせいなのか、それとも夏休みに何かあったのか。まあ私が見つかったことじゃないし、どうでもいいけどね。静かになって逆に嬉しい。

「どう八幡？今日の弁当の出来は？」

「そうだなあ。味はもう満点。だが、トマトが入ってる……」

「えー、トマト美味しいのに」

「トマト以外は何でも食えんだけどな……」

成程トマト限定ね。私は八幡の残したトマトを口に放り込む。それと同時に蘭子が口を開いた。

「春歌が口移しすれば食べれるんじゃない？」

「ぶっ！」

「げほっげほ！」

「痛！」

蘭子の発言に私は口に含んだミニトマトをポーンと目の前にいた有希の額にクリティカルヒットさせた。

「ちよつと蘭子！」

「えへへ、冗談冗談」

「比企谷君、このミニトマト食べる？」

「返答に困る質問をするなよ……」

さすがに食べたくないなんて言われたら、私が傷つく……。本当に困る質問だね。

さすがに机に落ちた上に一度私の口内に入った物は食えないだろうと思ひ、廃棄となつた。どうでもいい情報だ。

放課後は八幡と帰るのが日課になっている。蘭子たち4人は各々部活があるから、たまにしか帰らないのだ。

「八幡帰ろう」

「おう」

八幡の下に行き、帰りに一緒に本屋でも寄ろうかなと考えていると、私の向いている方向、後ろでグループを作っている人たちがこっちを向いていることに気づいた。いや、正確には1人の女子。由比ヶ浜結衣という名前の、おっぱいが大きい子。……ぐぬぬ。

どうやら見ているのは私達で、特に八幡の方に視線を向けている。そして私と目が合うと、バツと視線を逸らした。

……もしかして、八幡の事…。

そう思つた瞬間、私の中で、独占欲というものが湧いてきたような感覚に陥つた。慣れない感情に若干困惑した。無性に、目の前の彼氏にくつつきたいと思つた。

「八幡、帰り本屋寄ろう」

「あ、ああ。いいけど、何で腕に抱き着いたんだよ……」

「こうしたいから」

### 3日目

放課後、八幡と本屋寄り。俗にいう放課後デートといふのかな。もしくは制服デート。ただいま私は満喫中です。

「なあ、そろそろ一旦離さないか？人目が…」

「あー、仕方ないか。さすがの私も少し恥ずかしくなってきた」

実は学校からここ本屋までずっとくっついたまま歩いていたのだ。至福のひと時でした。

「どうしたんだ？今日はいつもとよりべったりしてたけど」

「え？嫌だった？」

「いやそういうわけじゃねえよ。ただ、なんつーの？見せつけてる感があつたから気になつてな」

す、鋭い……。さすが八幡。時々思ったことを見透かされて心の中でも読めるんじゃないかと思うよ。

「後ろで集団作ってるグループあるでしょ？」

「あー、あのうるさい連中か。最近おとなしいが」

「そこにいる女子が八幡の事見てたんだよね」

「えー、そんなことあり得るのか？」

「本当だよ。八幡心当たりは？」

「あると思うか？俺だぞ？」

「確かに……」

今思えば、八幡は高校生活で私としか関わっていなさそう。いや、絶対そうだ。だって八幡は私と家族以外興味ないと思うし。去年は違うクラスだったけど、ずっと1人って言ってたし。言われなくてもわかってるって感じだし。我ながら酷い事言ってると思うけど事実なんですよね。

「で？その、俺を見てた女子？何で見てたかは知らんが、放っておけばいい。あのグループなんだろう？俺嫌い」

「そっか。八幡がそう言うなら私も気にしない」

「しっかし、道理でいきなり腕に抱き着くわけだ。嫉妬したんだな」

「う、うるさい。いいでしょ！見せつけたかったの！」



「そんな見せつけてると後での報復が怖いぞ」

「その時は八幡が守ってくれるでしょ？」

「さあな」

「えー、ひどーい」

「それより、本買いに来たんだろ？」

あ、すっかり忘れてた。

八幡と付き合う前、去年本を紹介してもらった時以来、私はかなりの読書家になったのだ。それのおかげなのか、苦手だった現代文の成績も良くなつて、八幡との話題が増えて楽しくなった。7割ラノベだけどね。

「ん？小町からメールだ。……………えー」

「ん？どしたつて……………あー」

八幡のメールを見ると、そこには『今日は外で食べてくるから、適当に済ませてね』と。無慈悲で容赦ない小町ちゃんからのメールだった。八幡、相変わらずの待遇なんだね。心配になってくるよ。

「今から飯作んのかよ…。めんどくせえ」

何食わぬ顔で放任されてることもまったく気にしない様子で、面倒くさそうな顔をする八幡。もうすっかり慣れちゃったのか。いいのかそれで……………。

「八幡、私の家行こうか。お父さんもお母さんも会いたがってるし」

「俺そんなに気に入られてんのか…。じゃ、ありがたくお邪魔するわ」  
普通に八幡とご飯食べたと言ってた。

## 4日目

「ただいまー」

「お邪魔します」

「おかえり春歌。比企谷君、いらっしやい」

玄関に出迎えたのは春歌の母親。一言挨拶をし、家へ上がろうとすると、思わぬ光景が目に入り、戦慄した。

「なあ春歌。俺が来ること、母親は知ってんのか？」

「え？言っていないよ」

「でも、何故か俺用のスリッパが用意されてるんだが……」

「あ、本当だ！」

まるで俺が来ることを予知していたかのように、用意されたスリッパ。しかし、当の母親は何食わぬ笑顔のまま、ちよつと怖いと感じてしまった。思わず予知能力でもあるんじゃないかと疑った。

「お？待ってたよ。八幡君」

そして次に現れたのは春歌の父親だ。この人もまた、俺と春歌を笑顔で出迎えた。見た目からしていい人だなあ。おまけにイケメン。

「お、お邪魔します……」

「なんだったら、ただいまって言ってもいいんだよ？」

「無理ですよ……」

「そうかあ。まだ無理か」

まだというか。今後とも言う気なんてないですけど。

さすがの春歌も、俺に対する馴れ馴れしい態度に参ったのか、俺の手を引っ張って、部屋に連れ込まれた。うくん、普通立場が逆なんじゃないかと思うんだけどなあ。でも、春歌の両親の接し方がもうすでに普通じゃないから、いつか。

「なんか、ごめんね。あんな両親で」

「まあ、嫌悪されてるよりかは幾分マシだ。ちよつと気が楽になった」

「私は気が抜けちゃったよ……。あ、着替えるから、ちよつと出でて」

「はいよー」

妙に上手い事を言った春歌はダンスを開けながら、俺の退室を願

う。俺は適当に返事をして、その場に座った。

「ちよつとお！そんな堂々と見ようとか凄い清々しいね！まだ早い！」

怒られてしまった。そんなわけで俺は今度こそ退室。まだ早いつてなんだよ……。そもそも、彼氏が胡坐かいて目の前で彼女が服を脱ぐなんて、色々と危ないな。

ドアのまでしばらく待っている間、今になって気付いたことを考えている。

着替えどうしよう……………。

なんか自然な流れで来てたから頭からすっぽり抜けていた。今から帰って取りに行った方がいいんだろうが、ぶっちゃけると、面倒くさい。

「八幡君、どうしたんだ？ドアの前で立って」

「春歌が着替え中です」

「突入だ」

「いやいやしませんよ！何言ってるんだ父親が」

「僕も八幡君と同じころ、同じ状況があつてね。その時は思いつきり入ってやったさ。案の定ビンタされたけどね」

なんて頭に手を置きながら、恥ずかしそうに話す春歌の父親。何故だろう。もっと緊張するはずだったのに、全然構える必要なんてない。

「あ、着替えなら僕のを使ってくれ」

何で知ってるんだよ……………。

## 5日目

『いただきます』

太宰家の食卓に、俺ガイル。これはあれかな。早めの結婚話とかしちやう展開なのかな? ほら、春歌結婚したって、言ってたし。

それに、なんだかこの両親なら気兼ねなく話せてしまうような気がする。

「比企谷君。学校では春歌どう?」

「ちよつとお母さん! 何聞いてるの?」

「ちゃんと高校生してますね」

「え? それ普通って事!」

「比企谷君。春歌のお弁当美味しい? 私には食べさせてくれないの」

「え? そうなのか?」

「う、うん」

それはすごいな。母親の味見とか指導がなくて、ほぼ独学状態での完成度とは……。何そのスキル。めっちゃ嫁に欲しい」

「な! ……な」

「あら〜」

「いやあ、春歌の恥ずかしがる姿は久しぶりだよ」

「え? ……春歌、声出てた?」

冷や汗を掻きながら、春歌に問うと、真っ赤な顔でコクリと頷いた。

はいやつちまった。失言のレベルを遥かに超える失言だった。春歌だけに。なんてシャレ言ってる場合じゃないな。ヤバいな、急いでる奴って思われるか。

「僕は八幡君なら大歓迎だよ。僕は、八幡君は、春歌の人生を担う事ができると思ってる」

「そうね」

「ええええええええええ!!!」

ガタツと大きな音を立て、俺と春歌は勢いよく立ち上がった。春歌に至っては椅子が倒れた。

「いやいやいやいやいや、よく考えてくださいよ! そんな安々と決め

「ていい事じゃないでしょ！」

「ん？そうでもないよ。僕は真剣に考えた結論だ。僕は、君がいい」  
「私も賛成よ」

俺、何かやったのか？数回顔を合わせただけなのに……。まるで俺のほとんどを知っているようだ。特に、父親の方だ。

ダメだ。分からない。頭の中で色々な情報が洗濯機のようにぐちゃぐちゃになりそうで、食べ物や喉を通らない。生きてきて初かもしれない。ここまで混乱することは。

「ちよつと急過ぎたね。謝るよ。この話は、また今度だな」

「八幡、私の部屋行こう」

「あ、ああ」

春歌に手を引っ張られて、俺はされるがままに部屋に連れて行かれた。



「ごめんね。今日のお父さん、八幡来て舞い上がってたみたいで」

「ああ、気にするな。ちよつと動揺しただけだ」

申し訳なさそうな顔の春歌の頭に手を置いた。

「八幡はさ、その、どう思ってるの？結婚とか……」

「どうって……。よくわかんねえ。まだ早いと思ってるし」

「私と、結婚したい？」

「そ、それを今聞くのか……」

ダメだあ、状況についていけない。そもそも何でこうなったあ？

家誰もいないから彼女の家に泊まりに来ただけなのに、いつの間にかプロポーズされてるよお。

「してえよ」

「え？」

「だからな、してえよ。結婚。誰にもお前をやりたくない」

「八幡……」

がああああああ！何言ってんの俺!?混乱しすぎたせいでおかしくなったか！ついに頭がコングラッチュレーションになっちゃったんか!?

ぐおおおお、と頭を抱えて唸っていたら、不意に後ろから何かに覆われた。言うまでもなく春歌が抱き着いていた。

「私も、八幡じゃなきや、嫌だ」

耳元でささやかれた瞬間、頭の中の混乱が一気に霧となって消え、ドツと疲れが体を支配したと同時に、俺の意識は途絶えた。

## 6日目

朝、睡眠から意識が戻ると、何かとても暖かいものを抱き着いているような気がした。それは何なのか分からないが、寝心地がよくて気持ちがいいから、強めに抱き着く。すると、ううんと小さい声が出た。  
……え？

重い瞼をゆっくり開けると、俺の胸板の前に春歌の顔があった。いつの間にかパジャマ姿になっており、俺にしがみつくように寝ている。なんとも無防備な様だ。俺以外の男だったら絶対触ってたぞ。気を付けてくれ。

「おい、春歌」

「んう、あく、八幡？おはよ」

「おはよう。それで、男なら誰もが夢見るこの状況は？」

「八幡突然寝た」

私も寝ようとした

八幡にくつついたら意外と気持ちよかった」

はい、分かりやすく3行でまとめてくれました。どうやら俺は突然寝てしまったらしく、春歌が添い寝してくれてたんだ。……………マジか。

「お前恥ずかしくないのかよ……。俺今にでも恥ずかしさのあまり頭打ちつけないんだが……」

「もう1年も彼女やってるんだよ。そんなことで恥ずかしがってたら、この先」

「お前顔真っ赤だぞ」

「言うなー！」

得意げにどや顔だったが、声上擦ってるしちよつと震えてるし。

キッチンに行くと、既に朝食ができており、両親もいた。

「八幡君、昨日はすまなかったね。混乱させてしまった」

「ええ、危うく頭パンクしそうになりましたよ」

「あの後母さんに散々しごかれたよ……。あはは」

「生き急ぎなのがあなたの悪いところよ。ごめんね比企谷君」

「大丈夫です。……おかげで決心しましたから」

俺の今の言葉に、眉を顰める太宰親子。予想外だったのが春歌も何かわかってない事だ。昨日俺に告白させた張本人でしようが……。変なところで鈍感のギャルゲー主人公かよお前は。

「俺、春歌の人生背負います」

結婚しますなんて言えるメンタルを持っていないヘタレな俺は、昨日の春歌の父親の言葉を借りた。

突然の俺の告白に、ポカーンとしてしまっている両親。春歌は持っていた箸をカタカタと音をたてながら、顔を赤くして震えている。

「春歌は、比企谷君と結婚したい？」

「…うん、したい。八幡以外となんて考えられない」

「はい。じゃあ決定。春歌は比企谷君のお嫁さんになりました」

「2人共、お幸せに」

朝、太宰家の食卓で、婚約者が誕生した。お互いどうしたらいいかわからないため、チラチラと見ながら朝食に手をつける。一方、目の前の太宰夫妻は俺らを見てニヤニヤと笑みを浮かべている。

さて、今一度問おう。

(どうしてこうなった！)



## 7日目

俺と春歌が婚約者となってから数十分。本当ならお互い落ち着きたいところだが、学校を休むわけにもいかない。お互い沈黙が続く中、学校に向けて足を運んでいる。たまに視線が合う度に逸らしている。昨日告白した男女かっつての。

案の定、学校で春歌の友達がその異変にすぐ気づき、昼休みの時間に問い詰められた。

「何で2人共そんな余所余所しいの？」

「え？そうかな？いつもこんな感じだよ（棒）」

「そうだな。いつもこんな感じだ（棒）」

「いやそういうのいいから。何があつたの？」

誤魔化そうとしたが、疑うどころか真顔で軽くあしらわれてしまった。俺ら演技というか、嘘が下手過ぎるのかもしれない。そもそも嘘を言う相手がいなかったから、嘘をつくのは慣れていない。人の嘘には敏感なのにな。

「えつとお、言っつていいかな？」

「ま、春歌がいいなら言っつちやっつていいぞ」

「うわあ、春歌凄いや顔赤くしてる。そんな恥ずかしい事なの？」

はい、その通りです。これから中学の頃から仲がいい友達の前で、俺と結婚しますなんて恥ずかしすぎるよな。高校生活の思い出になるだろう。黒い方で。

「八幡と婚約しました」

皆その場で静まり返った。周りのクラスメートが騒ぐ中、春歌の言葉が皆に鮮明に聞こえた。

箸が完全に止まって、俺と春歌を交互に見てポカーンとしている。皆の沈黙が相乗効果を生み、春歌は恥ずかしさのあまり顔を伏せてしまい、わずかに震えている。かくいう俺も今すぐ逃げ出したい気分だ。

「あ、あれ？」

皆が想像してたよりも落ち着いていたから、それに異変を感じたの

か、春歌は顔をあげて顔色を窺っている。これは俺も予想外だったから眉を顰めた。

そしてその沈黙は、リーダー格のある奏菜つて子が破った。

「春歌、おめでとう」

「え?…う、うん」

「比企谷君。春歌はね、かなりの甘えん坊だから、精一杯甘えさせてね」

「何言ってるの奏菜!？」

「比企谷君。死ぬまで春歌を愛してね。いや、死んでも愛してね」

「ま、まかせろ?」

「蘭子!？」

「結婚式には呼んでよね」

「待って!ストップ!皆一旦喋らないで!」

「ねえねえどっちからプロポーズしたの?」

「皆落ち着けえ!」

怒涛の質問攻めに春歌も参ったらしく、あまり聞くことができなであろう、大声と声音に一同黙り込んだ。春歌も一息つき、放課後に話すと言い、俺もそれを了承した。

あ、俺も小町とかに言わなきゃいけないな。小町は春歌の事知ってるけど、両親は俺が彼女いる事知らないから。何で言わなかった?言っただって信じてもらえるかといったら、それでもなさそうだな。俺だぞ?!

## 8日目

春歌の友達に婚約したことを話し、祝福の言葉をもらってから数日後の祝日。あれから特に変わったことなどない。結婚する約束をしたからって、変わることはない。今は高校生らしい男女交際をすればいいのだ。

「あー！そこでそれはずるい！」

「残念だったな。運も実力の内だ」

現在は比企谷家で俺と春歌は向かい合って、某大人気TCGで対戦している。春歌がメイドが本業に対し、俺は天空の覇者だ。フォルテは勝った時の笑みがグツとくる。

「ねえ、付き合ってる男女の高校生がすることなの？それ」

「小町、それは偏見というやつだ。そんな外でデートやらしてばっかだと、お金がかかる。高校生だからそんなに余裕ないから」

「そうだよ小町ちゃん。こうやって彼氏と一緒にゲームだって大事な時間だよ。あ、八幡、このカードって分解していい？」

「ん？あー、ロイヤル使うならそれはいいんじゃないか」

「分かった」

春歌の隣に小町あり。小町は将来の義姉にくっついて百合雰囲気は若干漂っている。

将来の義姉と言っても小町にはまだ婚約したことは報告していない。今年は受験生だし、今知ったら勉強に集中できるとは到底思えない。

受験合格祝いに報告でもしようかな。

「ところでお兄ちゃんと春歌さん、何かあった？」

「え!?!」

しかし、こういう事に関しては鋭くおめでたい乙女思考を發揮した小町。たった今決めたのにもう言わなきゃいけない雰囲気になりそう。ここは上手く誤魔化そう、と春歌とアイコンタクトを取り、実行に移る。

「え？いつもこんな感じだよ」

「何か変か？」

「ううくん、確かにそうだけど……。なんか違和感。ま、いつか♪」  
単純な奴で助かった。

「あ、もう夕方だ。ごはん作らなきゃ。春歌さん、食べてってください  
！」

「いいの？ありがとう♪私も手伝うね」

「いえいえ、お客さんなのでゆっくりしてください」

「ううん、私も作りたい。花嫁修業花嫁修業！」

「はえ？」

「おい！」

「ん？……あ」

はい。俺の彼女がエクスプロージョンという爆裂魔法級でやらか  
してくれました。ついさっきアイコンタクト取ったばかりにも関わ  
らず。

誤魔化そうにも小町にはつきり聞こえてたため、もう言い逃れはで  
きない。小町は春歌の発言で大体事態を把握したのか、悪い笑みを浮  
かべている。

「これはもう、ご飯の時に尋問するしかないね♪」

すると、俺達の事が気になりすぎたのか、料理にブーストがかかり、  
もう出来上がってしまった。そして俺達は、春歌の友達の時みたい  
に、そのまま話を話した。

「およよ。まさかあのごみいちちゃんが、そんな男らしい事を言うなん  
て……。嗚呼、小町涙が……」

めちやくちや失礼だろ。

## 9日目

もうすぐ文化祭が始まる。今日はその役割決めだ。前回は俺の幻影の覇者、もとい影の薄さで見事無職を獲得したが、今回はそうはいかないかもしれない。

春歌とその友達と弁当を共にしたため、俺の薄さは改善されてしまっただろう。言つとくが俺は基本傍観者だ。話しかけられたら、返す。俺はロボット。

最初は実行委員決めだったが、葉山が1人の女子を推薦したため、その人に決まった。ああ、可哀想に。完全に葉山に乗せられて、ノリで実行委員になった感じだ。絶対に途中で折れる。

F組の企画は、あの葉山率いるグループの女子が提案した星の王子さまの劇だ。主役はその葉山ともう1人、何回か見かけたことがある銀髪の美少年だ。何で男同士なのかわからないな。あの女子の趣味なのか。

◆ ちなみに俺達は普通の裏方を任された。

役割決めから数日。目の前では劇の練習が始まっており、俺達裏方は材料などを運んでいる。

春歌の横で教室を見渡していると、ドア付近で駄弁っている女子集団に違和感を覚えた。

「どうしたの?」

「ああ、あいつらだ。ちよつと気になつてな?」

「浮気?」

「断じて違うからな。俺お前しか見てねえから」

「冗談なんだから、恥ずかしい事言わないでよ……。何が気になるの?」

「あいつ実行委員だろ?もう会議始まつてるはずなんだが…」

「あー、相模さんだっけ?確かにおかしいね」

まあ、あの爽やかイケメン(笑)の葉山に乗せられ半分、ノリ半分で実行委員になったんだ。こうなることは大体予想できていた。

だからといって心配かというとは全然そうでもない。このクラスはあの集団がメインで動いていて、クラスメートはただ裏方だから、本番俺らに仕事はない。そもそも他にも企画やりたい奴もいただろうに。あの三浦とかいう女王気取りが威圧で有無を言わせなかったから、誰も発言できなかった。この中に少なからず不満な奴はいるんじゃないかと思う。

「八幡、今年も2人で文化祭回ろうか」

「最初からそのつもりだ。それにしても、付き合って1年か早えな……」

「そうだね。なんかあつという間に感じるな」

「春歌が俺の胸倉掴んで無理矢理キスしてから1年だな」

「ちよつと！今思い出して恥ずかしい思いしてたのに、追い打ちかけないですよ！」

「今度は俺からしてやろうか？」

「ええ!?…じゃ、じゃあ、お願い」

あれー？冗談で言ったのに本気にされて期待されてしまった。これはやるしかないようだ。何故か今になって緊張してきた。

## 10日目

2週間の準備期間を経て、今日はいよいよ文化祭。あるところは売店、あるところは劇やお化け屋敷など。額に汗を掻きながら仲間と共に楽しんだ文化祭準備。今日は出す側も出される側も精一杯楽しもうと、ウキウキが隠せない人がちらほらという。

とても思ったか？

現在俺は春歌の家にいる。当然隣に春歌が座っている。何故かという文化祭は中止になったからだ。

文化祭が中止になった理由は、文化祭実行委員、通称文実の人が全然機能していなかったらしい。サボる人は大勢、生徒会役員やサボっていない真面目な人が必死に仕事を処理したらしいが、間に合わなかった。

そのサボる人が出た原因がああ相模という奴だ。あいつはノリで実行委員になったにも関わらず委員長をやっていたのだ。何を血迷ったのか理解に苦しむ。

風の噂で聞いた話だと相模が実行委員の皆にサボってOKみたいな発言をしたらしい。そこにはあの学校でかなり有名の雪ノ下雪乃とその姉が関係している。それくらいしか俺らは知らない。

まあ案の定相模は全校生徒からブーイング&罵詈雑言。体育館ステージで全校生徒に土下座させられていた。3年生は正直可哀想だと思うな。今年で最後なんだから。

まあ、同情の余地もないな。ざまあ、としか思わない。

「暇だね。八幡」

「まあ、予定が消えた人間だったら皆こうなるだろう」

文化祭を回る予定が無くなり、今は春歌の部屋でオセロをやっている。

「そーいや、春歌の親って2人共働いてるのか？」

「うん。お母さんはパート。お父さんはカウンセリングのお仕事してるんだよ」

「お前のお父さん凄い人だったんだな」

「まあ、この間の見たら想像もできないよね……」

娘の彼氏を混乱に陥れる人がまさかのカウンセリングを生業としていたとはな。



八幡とはあれからオセロに某イカゲー、映画とか楽しんだ。一緒に文化祭を回るといふ楽しみがなくなったのは、正直残念な気持ちだった。まあ、いつものように家で遊ぶことも楽しいけどね。

だけど、八幡との約束がまだ果たしてない。もうすぐ日が暮れるというのに、未だにキスをする素振りすらない。これはもう私から……。いやいや、八幡が自分から言ったんだから、ちゃんと果たしてもらわないと。

「んじゃ、そろそろ帰るわ」

なんて考えてたら、とつくに外は暗くなっており、晩飯時だった。

深く、深く、落ち込みながら、玄関で八幡を送る。

「っー」

すると、力強く胸倉をつかまれ、八幡の唇と私の唇が重なった。突然すぎる出来事に頭が追いつかない。だが、顔はしっかり追いついているようで、みるみるうちに顔が火照ってきた。

「は、八幡……」

顔をあげると、顔を赤くした彼の横顔が映った。ちよつと可愛い。

「俺は友達いねえから約束が重なることがない。だから、約束は絶対に覚える体質だ」

彼は私の頭に手を置きながら、早口でカッコつけたことを言い、早足で帰っていった。

彼の背中をしばし見守る。私の口角は今日で一番上がっていた。



## 111日目

文化祭が中止になった日から1ヶ月。俺と春歌は久しぶりにベストプレイスで昼食をとっている。春歌の友人が昼休みに用事があるのが理由だ。久しぶりの潮風はやはり心地いい。

「ねえ、八幡」

「ん？」

「高校卒業したら、どこの大学行くの？」

高2の2学期となれば、そろそろ考えなきやいけない、進路。春歌は淡々とした口調で聞いてきた。

ちなみに俺は最初から決まっっていて、深く難しく考える必要がなかった。理系が絶望な俺は私立文系一択だ。

そのことを話すと、春歌は頭をへこませた。

「私、特にやりたいことないし、大学もどこがいいのかわかんないんだよね」

「なりたい職業も無いのか？」

「うん」

「…いや、春歌はもう就職先決まってるぞ」

「え？どういう事？」

「俺の嫁」

「なっ!？」

柄にもなくそう言うと、春歌はバツと俺から視線を逸らし、顔を赤くして俺の腕を強く握った。筋肉はそれなりにあるため、全く痛くない。

「本当にこいつは……。普段あんなへたれなくせにこういうことは平気で……!」

「へたれは余計だ。……でも、大学は行くとして、就職は考えなくていいんじゃないか？」

「でも、それだと八幡に迷惑」

「別に春歌のためなら、働いてもいいしな。でも、どうしてもというなら俺が主夫になってやるよ」

「いや、そんな期待された目で見られても……。八幡にはすっかり働いてもらうからね」

「はいはい、すっかり社畜するよ。公務員安泰だから、職種なんでもいい」

「適当だー……」

普通に会社勤めがいいんだろうな。教師だと生徒の陰口怖い。警察はめっちゃくちや動きそうだから嫌だ。凶器とか怖い。他にもあるが体を動かすとか人助けの職業ばかりだ。俺には合わん。俺やっぱヘタレじゃん。

「なんかすげえ話逸れたな。結局大学はどうすんだ？」

「今決めたよ。八幡と同じところ」

なんとなく予想はしていたが、驚いた。今の春歌なら頑張れば受かるだろう。ここの所文系の成績がますます上がっているし、モチベーションも申し分ない。

「志望動機は？」

「婚約者がそこ希望したから」

「それ絶対進路調査票には書くなよ？」

「書くわけないでしょ!?!即書き直しだよ!」

もし担任の先生にそれを見せたら、絶対職員室で涙を流すだろうな。あの人、結婚できないのが一番の悩みらしいし。F組の生徒にたまに愚痴こぼすくらいだからな。その度に教室がどよんとした雰囲気になる。

「あ、私銀行員ワンチャンない？」

「したら誰が家事やるんだよ……」

「私が両立!」

「あほ。おとなしく俺に養われとけ」

## 12日目

「この時間は2週間後に行われる修学旅行の班を決めたいと思います」

LHRを進行する委員長の言葉に、文化祭中止という悲劇を払拭するかのように盛り上がる教室内。委員長の合図とともに、いつものメンバー、通称いつメンで集まり、班を形成させていった。

俺は自動的に春歌と春歌の友人に混じった。ありがたいことに男女何人ずつとかいう制限がないから気楽だ。

案外早く班が決まったから、委員長から追加指令。それぞれの班に旅行雑誌が配られ、何日目はどこに行くか簡単に計画をすることになった。

ここでも俺は傍観者。行先は春歌の友人に決めてもらい、俺は春歌と共に付いていく。

「3日目の自由行動はどうする?」

「時間内に戻ればどこ行ってもいいんだよね?」

「ならいつそ京都から出ようか!」

「あ、3日目は春歌と京都回りにえから、俺らは外れていいか?」

「私、3日目は八幡と一緒にいたいから、外れていい?」

同時だった。彼女たちが3日目の話をしていて、それを遮るタイミングまで一緒だった。春歌と顔を見合わせ、沈黙が続いた。春歌の友人は、雑誌で口元を隠して俺らを交互に見ている。絶対ににやけてるな。

「じゃあ、私達で春歌と比企谷君のデートプラン立てようか!」

「いいねそれ!」

「あわよくばラブホに誘導……」

「待って!?何で皆がそんなウキウキしてんの!そ、それに、高校生がラブホなんて!」

「春歌声でけえ!」

「し、しまった……」

危ない危ない。いや、完全にアウトだけどな。けど、幸いにも周り

が騒がしいからクラスメートの耳には届いていない。

一方大声で失言をした春歌は俯いて震えている。それを友達が笑いながら、頭を撫でてあやしている。なんだこのほんわかする百合空間は…。しかし、それはどう考えても逆効果だ。見ろ、ますます顔が赤くなってる。

「じゃあ比企谷君。3日目は春歌と楽しんできてね」

「おう。サンキューな」



放課後になり、俺と春歌はいつもの喫茶店に寄った。

「京都どこ回ろうか？」

「まだ2週間あんだし、今考えなくてもよくないか？」

「いいのいいの。こういう時間も楽しいし」

「まあ、そうだな…」

コーヒーを啜りながら、京都旅行の雑誌を広げる俺と春歌。やはり京都と言えば神社巡りなんだろうけど、さっきからグルメしか目に入らない。和菓子がめっちゃくちゃ美味そう。

「あ、修学旅行？いいねえ〜」

横から聞こえた声の正体は、春歌が前から知り合いの女性店員だ。実は俺も良くしてもらっている。この人、俺らがいる時は毎回働いてるけど、しつかり休みをとっているのか気になってしまう。

「はいこれ、サービスね♪楽しんでおいで」

そうやって俺らに1人前のパンケーキを置いていった。ありがとうくださいだこう。

## 13日目

修学旅行当日がやってきた。集合場所である東京駅へ春歌と行き、今は新幹線内だ。さすが新幹線だな。速過ぎて景色が全然堪能できない。

特に暇つぶしするものがないため、隣で友達と喋っている春歌を横目に、俺は浅い眠りについた。

「…ちまーん、起きて」

「…ん？」

名前を呼ばれた気がして、目を開けたら、目の前に春歌の顔があった。何この距離。数センチ俺が前に出れば唇が触れちゃうじゃないか。誘ってんのか？

「もうすぐ着くよ」

嘘だろ？ついさつき出発したばかりかだぜ？俺ただけ寝てたんだよ。仮眠程度のつもりでいたのに…。外を見ると、すっかり風景が変わっていた。



修学旅行1日目が終わりに、風呂と食事を済ませた俺は、土産屋の前にある椅子に座りながら、自販機で買ったコーヒーを飲んでる。ここが京都だっことを忘れてたぜ。マッカンがねえんだもん。

小町からは八つ橋や京都限定のストラップを頼まれたから、飲み終わったらあの土産屋に行くつもりだ。おかしいなく、中学の修学旅行では俺には何一つ買ってきてないくせに。自分の金じゃねえしどうでもいいや。

「あ、比企谷君」

俺の名前を呼び、俺の下に駆け寄ったのは春歌の友人、東雲奏菜だ。

「春歌が探してたよ」

「そうか。じゃあここにいる事伝えてもらえないか？」

「OK」

東雲は素早く携帯を取り出し、かなりのスピードで文字を打ってい

く。打っていく！打っていく！あまり見ることでできない早打ち  
について実況者みたいに熱くなつてしまった。

「じゃあ、少し話そうか」

「いや全く繋がってねえよ。何でだよ……」

「だって比企谷君。昼休みいつも黙ってるじゃん」

「あそこに俺が入る余地はない。後俺ヘタレ」

「堂々と言うんだねそれ……。まあ、本当に少しだけだから」

「はあ、わーったよ」

多分拒否しても無駄だと思った俺は、少しだけ喋ることとなった。  
ヤバいな、春歌以外の人と喋ることなんて滅多にないから、会話が続  
かなそうだ。春歌との出来事ならまだマシ。

「率直に、どつちから告白したの？」

「聞いてないのか？」

「うーん、春歌に聞いても教えてくれないんだよ。頑なに喋ろうとし  
ない……」

だよな、確かに言えないよな。私が無理矢理キスしたなんて。

ここで俺の悪い癖である悪戯心が芽生え、俺は東雲に当時の事を話  
した。



「おまたせー」

10分後、春歌が到着。

「ん？奏菜、何でそんなにやけてんの？私見て」

「ん？何でも。ただ、春歌って大胆だなくって」

「……………あ！八幡まさか！」

「胸倉掴んで無理矢理キス♪」

「恥ずかしいから内緒にしたのにいい!!」

東雲にからかわれ、真つ赤になつた顔を両手で覆い隠しながら、そ  
の場に座り込んでしまった。それを見た俺と東雲は口元を隠して、笑  
いこらえている。

「何で言ったの八幡！」

「言っつていいかと」

「いいわけないでしょ！馬鹿ー！」

今度は俺の腹にダイレクトに抱き着くように飛びついてきた。今は俺は座っている体勢だから、角度によっちゃ危ない画になってしまふ。

「じゃあ私はこれで」

東雲は手を振ってこの場を去った。

「春歌、そろそろ離れてくれないか？」

「やだ」

結局、その後10分くらい抱きしめられたままでした。一般客の視線が痛かったです。



F組男子の寝室に戻ると、それはそれは賑やかになっていた。あの葉山グループがね。

何でも、3日目の自由時間、グループ内の女子に告白するらしい。どうでもいいけど、そのままフラれて気まづくなってグループ崩壊なんて未来が見えたような気がした。

## 14日目

修学旅行2日目も無事終わり、今日はいよいよ3日目の自由行動。春歌と2人で京都巡りだ。

「美味しい〜♪」

「めちやくちや美味しいな。さすが本場」

俺達は今緋毛織ひもうせんという赤い布が被せられたベンチに座って、団子に舌鼓を打っている。やつぱり京都と言われて思い浮かぶ物は、赤いベンチで団子を食べる情景だよな。今俺と春歌はそれを体験している。

「それもーらい♪」

「あ、おい」

団子を持つている手を自分の口に持っていき、俺の団子をパクツとかつさらった春歌。幸せそうな笑顔が可愛いらしいねえ。

「はい。八幡も」

「ええ……」

「何で嫌そうなの!」

「冗談だ」

差し出されたこしあん団子を一つパクリンチョ。ふむ、俺はみたらし派だが餡子も悪くない。

◆  
続いてやってきたのは、太秦映画村。そこにあるお化け屋敷に入ることになった。

春歌は大のホラーが苦手な奴だ。お化け屋敷に入ってから緊張して腕にべったりくっついてる。若干腕が痺れてきた。それと柔らかい。ナニとは言わないが。

「ひゃあ!!」

「ごっつ」

突然驚かされた春歌は俺の胸元に突進するかのような勢いで飛び込んできた。春歌の頭部が、ちょうど俺の鳩尾に……。

「あ、ごめん……」

「ああ、苦手なんだからしゃあない。それに鍛えてるから大丈夫だぞ」



「そ、そう……………。きやあああ！」

「ごふっ！」

……………

「結構スリルあったな」

「う、うん…」

ダメだこりや。完全にあまりの恐怖で震えてしまっている。まさかここまでホラーが苦手だとは予想外だったな。見た感じ、昔何かあったんじゃないかと疑うレベルだ。

「春歌、昔ホラーとかで何かあったのか？」

「そ、それがね、昔お父さんとお母さんが」

あー、成程ね。大体分かった。あの両親の事だ。きつと春歌を怖がらせようと色々やってたんだな。それで結果がこれか…。義父さん義母さん、やりすぎ。

馴れ馴れしい呼称をしながら、近くのベンチに座り、一息つく。座った途端、春歌は隣の俺の顔をジッと見ている。いやん、そんなに見つめられると恥ずかしいわ！…気持ち悪いな。自分でやって吐き気がした。

ここで俺の十八番である人間観察を発揮する。春歌が見据えているのは、俺の目ではなく、その下の鼻でもなく、さらに下の、口元。「っ!？」

それが発覚すると、それと同時に春歌に胸倉をつかまれ、唇を重ねてきた。なんで……………。

「ん。落ち着いた」

「おい、俺の唇は精神安定剤じゃないぞ」

「気にしない。八幡嬉しそうなくせに♪」

「いや、まあ、すげえ嬉しいけど……………」

「そ、そっか……………」

いや照れないでくださいよ。自分からやってんでしようが……………。

その後も、気まずい雰囲気にはならず、キスのマンネリ化を考えながら、京都観光を楽しんだ。

## 15日目

年に一度の行事、修学旅行が終わり、落ち着きを取り戻した生徒は今日も今日とて授業授業。大きい行事が終わったら、進路について本格的に考えることが必要になる。進路ガイダンスや講習会の募集なども行うようになってきた。

それともう一つ、ここF組でも変化があった。

それはあの葉山グループだ。修学旅行が終わってから、なんだか全員ぎこちない。葉山が何とか話題を切り出しているが、その他の奴らは空笑いに無表情、俯きなど。それはもう崩壊寸前のように見えて仕方がない。

原因はなんとなく察している。ホテルで寝る時にふと耳に入った、男の告白宣言。3日目に実行した挙句、フラれて気まづくなったという事だ。俺の予想当たっちゃったじゃん。

そんなことはどうでもよく、そろそろ次の行事である生徒会選挙が始まる。風の噂では1年生が生徒会長に立候補したとか…。

放課後、春歌と帰宅中にて。

「めんどくせえ」

「別に八幡がやるわけじゃないんだから」

「いや、ほら。ずっと立って話聞かなきゃいけないし。ぶっちゃけ誰でもよくね?..」

「確かにそうだけどね。演説だって心にもない事言ってるだけだし」

ホットコーヒーを煽りながら、寒空の下、生徒会選挙の闇を眩く春歌。確かに俺らに演説した所で意味があるとは思えない。理由は単純。俺ら傍観者には関係がないからだ。投票だって大半は立候補者全員を○にしている。演説を聞いたって『はいそうですか』としか思わない。まあこれはあくまで俺の持論だ。世の中にはそうじゃない人も一部いるはず。

「私、こう見えて中学では生徒会やってたんだ」

「すまん、前言撤回だ。大事だよな生徒会選挙。やっぱり怠いと思っ  
ててもしつかり聞いてないといけないんだよ。彼らだって頑張っ

演説考えてんだから。

ていうか生徒会経験あるなら、そういう闇を眩くのもどうかと……。

「意外だな。役職は？」

「庶務」

「……………似合うな」

「どういう事！これでも凄い仕事できて信用されてたんだから！」

春歌が会長、無いな。書記、会計、副会長、……………ないな。そう思うと庶務の方が春歌にしっくりくる。

「え？私ってそんな地味」

「全国の生徒会庶務に謝りなさい。後それ自虐になってる」

「八幡から言ってきたんでしょ！」

「庶務は大事だぞ。雑用は多いが裏ではしっかり生徒会を支えている。ありがたい役職だ」

「へえ、そうなんだ。なんかやったことあるような口ぶりだね」

「あくまで俺の主観的意见だ」

「そっかあ。だからあんな雑用多かつたんだ」

2人組の天才ゲーマー曰く、『何も持って生まれぬ故に何者にもなれる』。これは色々なところでも例えられる。今出てきた庶務でもだ。何も特徴がない役職からこそ、どんな時でも対応が効く。

「春歌ってすごいんだな」

「ど、どうしたの急に。褒めても嫁ぐことしかできないよ！」

「それこの上なく嬉しいんだが……………」

## 16日

生徒会長は何とあの雪ノ下がなった。応援演説がまさかの葉山だったことが一番の驚きだったな。噂の1年生立候補者も事実であり、そいつは残念ながら落選した。学年1位で教師も一目置いてるような人物が相手だから、仕方ないっちゃ仕方ないな。

そんな生徒会選挙も終わり、防寒具が恋しい程の寒気が下界に舞い降りた今日この頃。教室の中にはマフラーをしている人が多数。授業中であれど今日くらいは教師も許可しているようだ。

何故かというと、雪が凄いからだ。吹雪に近い降雪。足場は不安定だし風は強いし、学校に来る前から皆すでに満身創痍だ。遊ぶ気にもなれない。

「うー、やぶい」

「こんなの予想外だよ」

「天気予報大外れ」

「帰りどうしようか」

春歌の友達4人はこの突然の雪に不満を漏らす。他の奴らも今よりも帰りの事を心配しているようだ。

「はあ、寒い」

春歌もこの寒さに参っているようで、ため息をついた。

「春歌は比企谷君とくっつかないの？温かくなるよ」

「うーん…」

友達にそう聞かれた春歌は俺を横目に考え始めた。そこで悩まれると彼氏としては結構複雑なんだが……。

「だってねえ……」

「だって」

春歌は何故か気恥ずかしそうな表情で俺らを見渡した後、そつぽを向いて小さな声で呟いた。

「そうしたら、嬉しすぎて暑くなっちゃう」

その言葉を聞いて、一同ポカーンとなり、沈黙が生まれた。春歌の今の様子に、この後言う事は決まっている。それは皆同じのようだ。

『かわいい』

一同言葉を揃えて感想を述べると、春歌は後悔の念を表情に出し、机に突っ伏した。

「比企谷君。くっついてあげて」

「さすがにここではできねえよ」



放課後、不安定な足場、不規則な風、それらを一層パワーアップさせる雪に翻弄された俺と春歌は自宅への道から一旦外れ、いつもの喫茶店に入った。この天候だし、中に客は全然いない。

「あれ？どうしたの2人共」

「あ、すいません。ここで休ませてもらっていいですか？」

「そういう事か。お安い御用よ。好きなだけいて」

「ありがとうございます」

「なーに、私と2人の仲じゃない」

すっかりこの女性店員と仲良くなった俺達。元々春歌は仲良かったけどな。俺も気に入られて連絡先を交換したのだ。

「はい、ホットココアだよ」

「ありがとうございます。しかし、こんな天気なのに仕事大変ですね」

「そうなの。こんな天気に来る人なんて滅多にいないのに。今日春歌ちゃん達が初めてよ」

それはもう閉店でよろしいんじゃないか？見た所厨房に1人しかいないし。ちなみにその人が店長だ。

「あ、少し話しませんか？このままいても暇ですし」

「いいねそれ。人もいないし、少し喋ろっか♪」

こうして、吹雪の中に佇む喫茶店の中で、俺と春歌と女性店員の雑談が始まった。

## 17日

女性店員と雑談が始まって、俺と春歌は時間も忘れて話に花を咲かせていた。言わなくてもいいと思うが大体春歌と店員が話をしている、俺は完全に聞き手となつて傍観していた。そのまま置き去り気分を味わおうと素数でも数えていようかと思つたが、俺素数知らなかつた。そもそも素数つて学校で習つたことないよな？テストで素数を答えろつて出題されたときは本気で焦つた。まあ素数書けなくても赤点ギリギリだけどね。

「あ、もうこんな時間」

「あら、本当ね。結構喋っちゃつたわ」

時計を見ると、短針は7の数字を超えていた。外は吹雪が落ち着き、すっかり青黒く染まり、その中にちらつかせる白い雪のコントラストがいい画になっている。こういうなんもない日に限つてクリスマスみたいな雰囲気になつてしまふんだよな。日本の謎の現象。

「じゃあね。2人共また来てね」

「はい、いつでも来ます♪」

上機嫌で俺の腕を抱きながら店を出た春歌。まあ凄い盛り上がりだつたからな（小並感）。どちらかという店員の方がズバズバと話題を出していた気がする。主に俺と春歌の関係について。あの店員は俺と春歌が付き合う前から知り合いだったから、気になつて仕方がなかつたんだろう。

「この後どうしよつか?」

「帰るんじゃないのか?」

「えー、折角だし夜一緒にいようよ」

おっとこれは誘つてんのか?男子高校生特有の煩惱が働いて、意味深に聞こえてしまうぞ。一般の男子高校生とはかけ離れている俺（多分）は慎重で勘違いすることはない。これは単に夜ご飯外で食べようの意味だ。

「まあ大丈夫だ。どこで食うんだ?」

「え?私の家でしょ?何言つてるの?」

真顔で俺の予想を粉碎された。

「外で食わないのか？」

「私を作った方が絶対に体に良い。何？私の料理が食べれないってわけ？」

「……どうした？」

「真顔で返された！」

どうしたこいつ？もしかしてたまにヤンデレになる一種の病か？そりやマズいな。俺が一生かけて傍にいねえと。あ、もうその約束したな。じゃあ大丈夫だ。

下らない事を心の中で言いながらも、店のよりも春歌の料理が食いたい俺は、即春歌の家にお邪魔した。

太宰家の入ったが、中に人がいる気配がない。部屋中真っ暗。

「誰もいないのか？」

「うん。あの吹雪じゃ帰れないでしょ。お父さんは会社に泊まって、お母さんは近くの実家に泊まるって」

「春歌、2人きりの環境にして俺をどうする気なの？破廉恥ね」

「何で!?別にそんな下心ないから!ていうかそれどっちかというところの台詞だからね！」

「冗談だ」

やはり春歌はからかいがあるな。反応が可愛いんだこれが。思わず頭を撫でてしまう程に。

「八幡さ、1年前とずいぶん変わったよね」

「そうか？あまり自覚はねえけど」

「うん。正直になった」

「……だとしたら、お前のおかげだな」

春歌と付き合って1年ちよつと。確かに俺の意識は変化した。灰色で、これからもずっと灰色で人生を送ると思っていたが、目の前の彼女によって、少しずつ明るい色に染められた。それは、やっと信頼できる人、守るべき人ができたから。俺にとって、まるでドラマのよくな出来事だと思う。春歌の友達も何だかんだでいい奴らだし。

未だに性根は捻くれてるがな。

「でも、目は腐ったままだね」

「これはもう俺にとつては相棒みたいなもんだ。そう簡単には手放さねえよ」

「そうだね。八幡のその目、私は好き。じゃあ、ご飯作ってくるね」

春歌は満面の笑顔を俺に見せた後、エプロンを着用し、調理を開始した。



18日

太宰家にて春歌の手料理をご馳走になり、夜も更けてきたため、カバンを手に取り、玄関に向かう。

「じゃ、また明日な」

「あ…………。うん」

「…どうした？」

「何でもないよ！また明日ね」

人の何でもないや大丈夫は当てにならないとはこの事だな。だって明らかに今寂しそうな顔してたし。春歌の友達から聞いた話だが、春歌は俺と出会ってから感情が豊かになったとか。初体験が多くていい刺激にもなったんだろう。それと同時に感情が出やすくなってたって事か。別に悪い事じゃないけど。

まだ9時ちよい過ぎだし、11時までには帰れば問題ない。

「んじゃ、春歌の部屋行くか」

「…え？帰らないの？」

「……やっぱ帰るか」

「待って！もうちよつと一緒にいたい！」

「分かったから」

若干浮足立ってる春歌の隣を歩き、前回来た時よりも片付いている春歌の部屋へきた。

「座って」

ベッドの上で自分の座っている隣をポンポンと手で誘導する春歌。

「何するんだ？」

「さあ？」

「何も考えてないのかよ」

「だってまだ帰したくなかったから」

「明日会えるじゃねえかよ」

「気分の問題！」

強引に話を終らせ、意味もなく袖を掴む春歌。しばらくして春歌の横顔を窺うと、上目遣いでこちらを見ていた。わずかに頬が赤に染

まっている。

「な、なんだ？」

「八幡はさ、この状況で何も思わない？」

「この状況？」

「年頃の男女が誰もいない家で2人きり」

「……………この変態」

「なっ!？」

全くこの子は一体何を言ってるんだか…。そんなえつちい子だとはね…………。

何も思わねえわけないだろ。俺だつて一応男だ。結構我慢してる方だ。あのね、今だつてドキドキしてハートキャッチされそうなんだよ。もう付き合ってる時点でキャッチされてるか。

「ねえ、本当に何もしなっ…!」

不安な表情を浮かべる春歌の頭にそつと手を置いた。

「何も思っていないわけじゃねえよ。ただ、俺も不安なだけだ」

「…別に一線超えるわけじゃないよ。ただ、過剰に触れ合うというか」「いや、俺だつてぶつちやけそうしたい。けど、俺が耐えきれねえ…………」

「……………ええええ!」

「触れるとあまりの刺激で気絶しそうだ」

「ええ…」

あく、失望されたか。理性が人1倍強い分、そういう事にはヘタレを超えたチキン野郎なんだよ。煩惱もあるし性欲もあるが、体と精神が追いついていない状態なんだ。

事情を話したら、見事に心底呆れられてしまった。

「子供か!？」

「う、うるせえ。仕方ねえだろ…………」

「いつもはチラチラ見てるくせに」

「ぐっ…」

「はあ、じゃあ私からした方がいつか」

そう言つて春歌は俺の両肩を勢いよく掴み、無理矢理キスをした。

春歌は結構力を入れていたみたいで、危うく菌同士がぶつかりそうになつた。さらにその勢いでベッドに仰向けで倒された。

「これじゃ、立場が逆……」

「ああ。お前ビツチになつてる」

「八幡がヘタレだからでしょ！」

「もつともです。」

「俺、そろそろ帰るわ」

「あ、もうこんな時間。じゃ、また明日ね」

「おう」



俺が超絶怒涛のヘタレ高校生という事を暴露した翌日。いつもと同じ時間に家を出て、登校。教室に入り、俺はいつものように真っ先に席に座り、本を開いて、自分の世界を創る。

「おはよう」

しばらくして、俺の世界に入り込み、笑顔で挨拶をしてくれるのは、最初で最後の彼女であり、婚約者の春歌。

「おう、おはよう」

今の様子じゃ、昨日の事は特に気にしてないようだな。切り替えが早すぎてまだ気にしてた俺が恥ずかしくなってくる。

特に何事も無く、トラブルに巻き込まれるわけでもなく、ただただ平穏に過ごす彼女との高校生活。これからも普通に平和に過ごしたい。厄介ごとは面倒くさいからな。

「ねえねえ八幡」

「どした？」

「昨日の事皆に話したら、『かわいい』って言ってるよ」

「はあ！お前何言ってるんだよ！」

彼女は舌を出しながら悪戯な笑みを浮かべ、すぐにその場を去つた。あいつ後でお仕置きする。